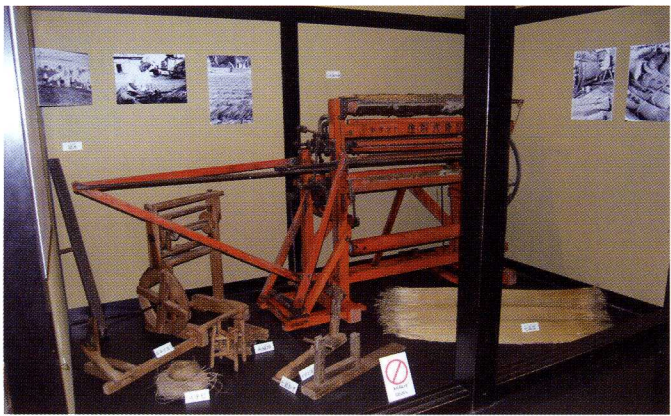


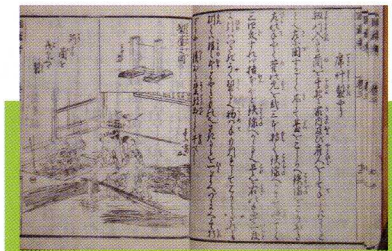
常設展示 豊後名産「七島表」コーナー開設



しつとうい たたみおもて ぶんごおもて
七島藺で作った畳表は「豊後表」と呼ばれ、豊後の名産品の一つでした。藺草の畳表よりも丈夫で長持ちするため、近代には柔道場などの畳として全国に普及しました。

豊後表の歴史は府内の貿易商、橋本五郎右衛門が鹿児島・トカラ(七島)から持ち帰った苗を、豊後で栽培したことから始まります。その後、農家にとっての貴重な現金収入源となり、昭和40年頃まで大分市の滝尾地区をはじめとする市周辺部で盛んに栽培されました。

七島表をあつかう農家は、七島藺の栽培だけでなく、収穫し、畳表の状態まで編んで出荷します。仕上げるまでの間に多くの手間がかかるため、現在では安価な海外製品やビニール製の畳表に押され需要が減り、全国では大分県国東市のみで製作されています。



こうえきこくさんこう
【広益国産考 三之巻】
江戸時代の農学者、大蔵永常によって記された資料です。七島表の作成工程、使用される道具、耐久性などが記されています。

【イチビ剥ぎ】
縦糸に使うイチビを細く裂くために使う道具です。イチビは平安時代から栽培され始めたといわれ、茎の皮から繊維を取り、ロープや麻袋として使用されていた植物です。



【タネリ】
七島表製作農家は縦糸も作ります。縦糸はタネリと呼ばれ、イチビという植物を細く裂いたものを縫って作ります。

【足踏式七島編み機】
大正6年頃登場した道具です。それまで畳表を編む作業は全てが手作業でしたが、足踏式になったことによって連続して作業することができるようになり、編むスピードは飛躍的に上がりました。七島表は十枚一束で売り買いされるため、一日十枚編めて一人前といわれました。

【七島剥ぎ】
七島表は七島藺の茎を半分に裂いたものを使います。針金を張った、七島剥ぎで一本ずつ裂いていく作業は江戸時代から、動力機が登場する昭和30年頃までかわらない風景でした。

利用案内

■開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)	■観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円) 中学生以下 無料 ※団体は20名以上	■交通機関 JR久大本線 豊後国分駅下車 徒歩2分 大分バス[国分新町ゆき] 歴史資料館入口下車 徒歩5分 大分自動車道 大分I.C.・光吉I.C.よりともに約15分
■休館日 月曜日 但し祝日の場合は開館 但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日	■身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。 ◎入館時に受付で手帳を提示してください。 ※特別展開催中は別料金となる場合があります。	
祝日の翌日 但し土・日曜の場合は開館 年末年始 12月28日～1月4日		

発行日：平成24年2月4日
発行：大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL097-549-0880 Fax097-549-5766
※大分市ホームページの「観光・魅力」歴史・文化財＞歴史・文化を学ぶ＞大分市歴史資料館 も併せてご覧ください。
(http://www.city.oita.oita.jp/)

ふれあい歴史体験講座

定員 各回70名程度(先着順)
時間 午前の部 9時30分～(約2時間)
午後の部 14時00分～(約2時間)

	実施日	内容	時間	材料費	受付開始日
第18回	2月11日(土)	管玉・丸玉作り	午前のみ	260円	受付中
第19回	2月25日(土)	土笛作り	午前・午後	50円	2月8日
第20回	3月10日(土)	古代火起こし	午前のみ	無料	2月21日
第21回	3月24日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	3月7日

応募 上記の受付開始日より、電話にて応募ください。
(大分市歴史資料館：097-549-0880)

ミュージアム・シアター

実施日 【●大人向け◎子ども向け】
2月26日(日) ●豊後路争乱[九州街道物語]
大友宗麟全盛～終焉[フレッシュ大分]
◎まんが日本昔ばなし
「赤ん坊になったお婆さん」「水神さまと虹の橋」
3月25日(日) ●やぎものの道 小鹿田焼/伊万里焼[九州街道物語]
◎まんが日本昔ばなし
「花咲か爺さん」「夢を買う」
時間 13時～14時
料金 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol. 98
2012.2.4



『館蔵陶磁器』
～やきものの魅力～

2012年
会期 2月4日(土)
～4月2日(月)

大分市歴史資料館 テーマ展示Ⅳ

館蔵陶磁器

～やきものの魅力～



<p>1 青磁 牡丹唐草文瓶</p> <p>15世紀 中国:龍泉窯</p>	<p>2 青磁 鎬蓮弁文碗</p> <p>13~14世紀 中国:龍泉窯</p>	<p>3 青磁 雷文碗</p> <p>15世紀 中国:龍泉窯</p>	<p>4 青磁 玉壺春瓶</p> <p>15~16世紀 中国:龍泉窯</p>	<p>5 青磁 稜花盤</p> <p>15世紀 中国:龍泉窯</p>	<p>6 青磁 酒海壺</p> <p>14~15世紀 中国:龍泉窯</p>
<p>7 青磁 夜学型器台</p> <p>14~15世紀 中国:龍泉窯</p>	<p>8 青花 麒麟絵皿</p> <p>16世紀 中国:景德鎮窯</p>	<p>9 吳須赤絵 寿字皿</p> <p>16~17世紀 中国:漳州窯</p>	<p>10 瑠璃地 餅花手盤</p> <p>16~17世紀 中国:漳州窯</p>	<p>11 斐翠釉 菊花形小皿</p> <p>16世紀 中国:福建地方</p>	
<p>12 交趾 花形香合</p> <p>16~17世紀 中国:田坑窯</p>	<p>13 交趾 鳥形香合</p> <p>16~17世紀 中国:田坑窯</p>	<p>14 華南三彩 鳥形水滴</p> <p>16世紀 中国:漳州窯周辺</p>	<p>15 華南三彩 鳥形水注</p> <p>16世紀 中国:漳州窯周辺</p>	<p>16 華南三彩 刻花文六耳壺</p> <p>16世紀 中国:漳州窯周辺</p>	<p>17 華南三彩 貼花文五耳壺</p> <p>16世紀 中国:漳州窯周辺</p>
<p>18 華南三彩 貼花文五耳壺</p> <p>16世紀 中国:漳州窯周辺</p>	<p>19 華南三彩 貼花文五耳壺</p> <p>16世紀 中国:漳州窯周辺</p>	<p>会期 2012年 2月4日(土) ~4月2日(月)</p>		<p>21 華南三彩 刻花文盤</p> <p>16世紀 中国:漳州窯周辺</p>	<p>22 華南三彩 印花魚藻文稜花盤</p> <p>16~17世紀 中国:漳州窯周辺</p>
<p>23 華南三彩 刻花雲龍文皿</p> <p>16~17世紀 中国:漳州窯周辺</p>	<p>24 華南三彩 刻花花鳥文小皿</p> <p>16~17世紀 中国:漳州窯周辺</p>	<p>25 華南三彩 刻花花鳥文平鉢</p> <p>16~17世紀 中国:漳州窯周辺</p>	<p>26 鉄絵合子</p> <p>15~16世紀 タイ:シーガッチャライ窯</p>	<p>27 鉄絵魚文盤</p> <p>14~15世紀 タイ:スコウタイ窯</p>	<p>30 黒釉鉄文帯飾三耳壺</p> <p>16~17世紀 ミャンマー</p>
<p>28 焼締陶器 四耳壺</p> <p>16世紀 タイ:メナムノイ窯</p>	<p>29 焼締陶器 四耳壺</p> <p>16世紀 タイ:メナムノイ窯</p>	<p>31 安南 黄白釉褐彩花文蓋付壺</p> <p>13~14世紀 ベトナム</p>	<p>32 阿蘭陀 色絵細水指</p> <p>17世紀 オランダ:デルフト窯</p>	<p>33 芋の子茶入</p> <p>16世紀 日本:瀬戸焼</p>	

表紙紹介 阿蘭陀 色絵細水指 (おらんだいろえほそみずさし)

淡黄色の軟質の胎土を特徴とするオランダ陶器。通称「デルフト陶器」と呼ばれ、一般にオランダの北ネーデルラント地方で製作されたものと考えられています。本資料は、上下をすぼめたような「アルパレロ形」と称される筒形の容器で、水指として国内に伝世したものです。日本では「阿蘭陀焼」として茶人などの間で珍重されています。国内の遺跡からは約20の出土例が知られており、年代がわかる事例では、1615年の大坂夏の陣前後に埋め戻された堺環濠都市遺跡の堀からの出土品があります。また、1632年に亡くなった徳川秀忠の墓からも埋葬品として出土しており、その使用年代がおよそ推定できます。

青磁は、青・緑色の釉を基調とした陶磁器で、東アジアでは、高級な趣味性の高いやきものとして重視され、東アジアの三大陶磁器の1つにも数えられています。特に中国の宋から明代(12~15世紀)に浙江省龍泉窯で開発された青磁は、世界中に輸出され、日本でも鎌倉時代以降、輸入陶磁器の主要な製品となっています。

16世紀になると、それまで限られた武家や寺社などに請来された大型の花瓶や酒海壺・盤などの青磁が各地の戦国大名クラスの遺跡から出土するようになります。これらは時代的に数百年以上古い13~15世紀の骨董品にあたり、室町時代に足利将軍家が好んだとされる唐物を至上とする価値観が戦国大名にも取り入れられたことを物語っています。大友館跡からもこうした青磁片が出土しており、都の権威に裏付けられた唐物を所有し、飾ることで、大友家の富や権威を示していたと言えます。

せいじ 青磁



かなんさんさい 華南三彩



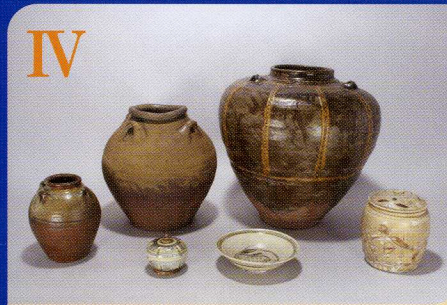
緑色の上薬を基調とし、文様部分に黄・緑・褐色の3つの釉薬をかけ分けた独特の色彩をもつ陶磁器で、成形方法から壺や盤などのロクロ成形のもの、香合や水注などの型作りのものの2つに分けることができます。いずれも明代の16世紀頃に福建省漳州窯周辺で生産されたことがわかっており、日本には当初、祭具などとして持ち込まれ、16世紀後半以降では、室内の飾りや茶の湯などに関わって輸入されたと考えられています。それはその後の織部・瀬戸などの国産陶器に大きな影響を与えたことからもうかがえます。豊後府内町における華南三彩の出土量は、南蛮貿易の中継地である琉球(沖縄)に次いで多く、国際貿易都市で知られる博多や堺を遙かにしのいでいます。このような状況から華南三彩は、豊後の南蛮貿易を象徴する出土品として位置付けることができます。

染付は、白い素地に青藍色の文様が鮮やかな磁器です。中国では「青花」と呼ばれており、元代(14世紀初頭)に江西省景德鎮窯でめざましい発展を遂げ、明・清代においても主要な製品として世界中に輸出されました。日本では16世紀に日用の食器として大量に輸入され、豊後府内町をはじめ各地の戦国時代の遺跡から出土しています。16世紀後半になると景德鎮窯より南の福建省漳州窯でも青花がつくれるようになります。これは粗略な文様や胎土を特徴とし、「呉州染付」と呼ばれています。この他に赤や黄・緑などの色で上絵付けされた「呉州赤絵(五彩)」や白泥を用いて文様が描かれた「瑠璃呉州(餅花手)」と呼ばれる瑠璃釉の磁器などもつくられています。これら漳州窯でつくられた磁器は、「呉州手」として愛好され、各地の戦国時代から江戸時代の遺跡で出土しています。

そめつけ 染付 呉州手



東南アジア産 陶磁器



日本には室町時代から江戸時代前期にかけて、さまざまな東南アジア産の陶磁器が舶載され、その中には「宋胡録(タイ)」「安南・交趾(ベトナム)」「南蛮・島物」などと称された一群がありました。これらは主に茶陶としての呼称であり、厳密な意味での原産国を示してはいません。日本の遺跡から出土する東南アジア産陶磁器の主な原産国は、タイ・ベトナム・ミャンマーです。豊後府内町の出土品には、タイ産の鉄絵合子など茶の湯に関わる交易品として考えられるものや、タイ産のメナムノイ窯の焼締陶器四耳壺やミャンマー産の黒釉鉄文帯飾三耳壺など、本来貯蔵容器として持ち込まれた陶器があります。後者はそれ自体が輸入品ではなく、貯蔵された内容物が交易品であったと考えられますが、中には茶人の趣向に合い、その後、茶陶として転用されたものもあるようです。